

社会福祉学部生の資格取得における実習支援体制と学生の意識

櫻 幸恵・高田梨恵・阿部明子・下平なをみ・岩渕由美・山崎陽史

Acquiring the Social Welfare Qualification - Field Work Support System and Student Awareness

SAKURA Yukie・TAKADA Rie・ABE Akiko・
SIMOTAI Naomi・IWABUCHI Yumi・YAMAZAKI Akifumi

本調査報告は、岩手県立大学社会福祉学部における実習支援体制及び学生の実習に対する意識について、学部の4年次生に対して行った質問紙調査の結果報告である。本調査は、4年に一度実施しており、今回の調査では、実習支援業務の評価や課題の抽出及び学生の実習や資格に対する意識調査の大きく2つの目的に基づいて16項目の質問を設定した。その回答を集計・分析することで、実習支援の現状と課題及び学生の実習や資格に対する意識を確認することができた。調査結果は、より効果的な実習支援の参考としたい。

キーワード：実習教育 実習支援体制 資格取得

This study report is the results of the questionnaire sent out to fourth year undergraduate students regarding their Awareness Towards the Practical Support System and Practicals at K University's Social Welfare Faculty. This survey is conducted every four years, and is set to question 16 items based on two major purposes - to investigate the awareness towards students' practicals and qualifications, and to extract the issues and the evaluation of the practical support services. By analysing the aggregated answers, it is possible to reveal the current state and issues of the practical support, and the awareness towards students' practicals and qualifications. The findings are helpful in constructing a more effective practical support system.

Key Words : field education program support system of field work qualification

I はじめに

岩手県立大学社会福祉学部実習教育開発室（以下、開発室とする）は、実習支援の専門部署として平成10年の開学時に開設され、社会福祉学部及び社会福祉学研究科の実習に関する連絡調整や情報収集・発信、学生への相談支援等の役割を担ってきた。

室長（教授・兼任）1名及び室員（助手兼実習講師・専任）6名が配置されており、室員は、原則、現場経験や専門資格を有している。各室員は、社会福祉士、精神保健福祉士、介護福祉士、保育士、幼稚園教諭、高校教員免許（福祉）などの資格取得に必要な実習を担当している。

実習支援体制に関しては、4年に1度、学部の4年次学生への質問紙調査により、開発室の実習支援業務の評価や課題及び学生の実習に対する意識を調査し、集計・分析を行って実習支援業務の参考としている。本調査報告は、学部の実習教育を効果的に実施するために、2010年度の4年次学生を対象に行った上記の質問紙調査の結果について報告するものである。

II 方法

1. 調査対象

岩手県立大学社会福祉学部2007年度入学生及び2009年度編入生の福祉経営学科（以下A学科とする）、

福祉臨床学科（以下B学科とする）の4年次学生98名を対象とした。

2. 調査方法

自記式無記名の調査用紙を各学科の卒業課題研究報告会後に配布し記載してもらい、その場で回収した。

3. 調査内容

「属性」「開発室の設備や体制」「配属実習の実施方法」「実習や資格に対する意識」の各々について計16項目36問の質問項目を作成し調査を実施した。

4. 調査時期

2011年2月

5. 分析方法

相談形態と満足度、取得予定資格と就職希望の項目では、調査結果の項目間の関連について、クロス集計し、カイ2乗検定を行った。また、良い実習に必要な要因について、主因子法・プロマックス回転を用いた因子分析を行った。尺度の信頼係数はCronbachの α 係数を用いた。統計処理には、SPSS18.0 for Windowsを使用した。

6. 倫理的配慮

対象者には、調査の趣旨及び記載したくない場合は拒否できる旨をあらかじめ伝え理解をとったうえで質問紙を配布した。また、無記名により匿名性を保持し、分析にあたっては個人が特定されないようデータの取り扱いには十分な配慮を行った。分析後はデータを破棄した。

Ⅲ 結果

1. 対象者の属性と実習履修者数

質問紙は、A学科は49人に配布し回収は47人、B学科は49人に配布し回収は49人で、合計98人に配布し回収96人で回収率は97.9%であった。属性は表1、実習履修者数は表2のとおりであった。

表1 属性

	(人)		
	A学科	B学科	計
男	4	12 (1)	16 (1)
女	43 (2)	37 (2)	80 (4)
計	47 (2)	49 (3)	96 (5)

※ 編入生 () 再掲

表2 実習履修者数（複数履修登録）

実習 学科	(人)							履修なし
	SW現場 実習	精神保健 福祉援助 実習	介護福祉 実習Ⅰ	介護福祉 実習Ⅱ	介護福祉 実習Ⅲ	児童福祉 実習Ⅰ	児童福祉 実習Ⅱ	
A学科	42	8	0	0	0	0	0	0
B学科	44	16	14	14	13	15	15	15
計	86	24	14	14	13	15	15	15

実習 学科	(人)								
	幼稚園 教育実習Ⅰ	幼稚園 教育実習Ⅱ	教育実習 (高校福祉・公民)	福祉調査 実習	福祉シ ステム 調査実習	フロン ティア 福祉実習	心理学 基礎実 験	心理学 特殊実 験	履修なし
A学科	0	0	1	44	28	17	0	0	0
B学科	15	14	0	0	0	0	14	14	0
計	15	14	1	44	28	17	14	14	0

2. 開発室（実習支援部署）の設備や実習支援体制

(1) 学生の利用状況について

回答者96人のうち92人(95.8%)の学生は開発室を利用したことがあった。A学科には資格に関連しない実習のみの履修学生も4人いることから、資格に関連した実習を履修する学生はほぼ全員が何らかの形で開発室を利用していた。

利用目的ごとの利用割合(複数回答)は、有効回答91人のうち提出物の提出が91人(100%)、室員への相談が36人(39.6%)、資料や書籍の利用が48人(52.7%)、PCなどの借用が23人(25.3%)、調べ物や書き物のためは29人(31.9%)、教員との面談は9人(9.9%)、室員の呼び出しに応じては53人(58.2%)であった。

(2) レイアウトや利用時間、資料について

開発室のテーブルや本棚の配置、実習先パンフレットや書籍の配置、利用時間、全体的な雰囲気に関して「利用しやすさ」を聞いたところ表3のとおりで、テーブルや本の配置は75人(83.3%)、実習先パンフレットや書籍の配置は72人(81.8%)、利用時間は86人(94.5%)の学生が利用しやすいと回答した。しかし、全体的な雰囲気については64人(71.9%)であり、他の質問項目と比べると10%ないし20%程低かった。学科内訳では、全体的な雰囲気が利用しやすいとの回答はA学科では62.8%、B学科は75.5%で10%以上の差があり、A学科の学生の雰囲気についての印象がB学科よりも低い傾向がみられた。

全体的な雰囲気の利用しやすさの理由に関する記述回答を見ると、B学科の回答では、「笑顔で迎えてくれる」「アットホームな感じ」「職員さんが好き」「知りあいの先生がいる」など親近感を感じているものが多いのに比べ、A学科の回答では、「開放的な感じが

表3 レイアウトや利用時間

	人 (%)		
	利用しやすい	利用しにくい	計 (%)
テーブルや本の配置	75 (83.3)	15 (16.7)	90 (100)
実習先パンフレットや書籍の配置	72 (81.8)	16 (18.2)	88 (100)
利用時間	86 (94.5)	5 (5.5)	91 (100)
全体的な雰囲気	64 (71.9)	25 (28.1)	89 (100)

する」など一般的な内容で書かれており、「職員の対応が悪い」「怖い職員がいる」などネガティブなものもポジティブなものと同程度あった。「静かなので緊張する」との記述は、両学科共に1～2人あった。印象の差については、B学科の学生が、保育士や介護福祉士、幼稚園教諭の実習で2年次生から4年次生まで頻繁に来室するのに比べ、A学科の学生はソーシャルワーク現場実習のみの履修で3年次の一時期だけの来室の場合も多く、そのことの影響も考えられるが今回の回答だけでははっきりしない。

また、開発室に配架してある実習先関係の資料や書籍、実習プログラム等の実習情報、国家試験の資料・書籍に関して、「十分」「まあ十分」「やや不十分」「不十分」の4評定でたずねたところ、何れも90%を越す学生が「十分」「まあ十分」と回答し概ね充足していた。

(3) 室員への相談について

実習に関する疑問や不安について室員に相談したいと思ったことがあるかについて「よくある」「ときどきある」「ほとんどない」「まったくない」の4評定で回答してもらったところ、表4のとおり3割の学生がよくある、ときどきあると回答した。

また、相談の有無を学科ごとにみると、B学科の方がA学科に比べて、「よくある」「ときどきある」の合計の相談件数が2倍以上も多かった。

実際に相談した内容を回答したのは27人で、その相談形態(複数回答)は、来室相談が21人(77.8%)、電話相談が3人(11.1%)、メール相談が5人(18.5%)、

表4 室員への相談の有無

区分	合計		A学科		B学科	
	人数	%	人数	%	人数	%
よくある	10	10.5%	2	4.3%	8	16.3%
ときどきある	22	23.2%	8	17.4%	14	28.6%
ほとんどない	48	50.5%	26	56.5%	22	44.9%
まったくない	15	15.8%	10	21.7%	5	10.2%
計	95	100.0%	46	100.0%	49	100.0%

授業時の相談が4人(14.8%)であった。

表5 相談形態

区分	来室	電話	メール	授業
人数	21	3	5	4
%	77.8%	11.1%	18.5%	14.8%

相談したことで疑問や不安が解決したかについては、「解決した」「ほぼ解決した」「あまり解決しなかった」「まったく解決しなかった」の4評定で回答してもらったところ、解決した16人(59.3%)、ほぼ解決した11人(40.7%)で、相談した学生は全員が解決に至っていた(表6)。

相談時の室員の対応には、「満足」「まあ満足」「やや不満足」「不満足」の4評定で回答してもらったところ、満足26人(96.3%)、まあ満足1人(3.7%)で高い満足度であった(表7)。

表6 相談結果

	人数	%
解決した	16	59.3%
ほぼ解決した	11	40.7%
計	27	100.0%

表7 満足度

	人数	%
満足	26	96.3%
まあ満足	1	3.7%
計	27	100.0%

相談形態が満足度に影響しているかどうかについて、クロス集計しカイ2乗検定の結果、来室の場合のみ自由度1で漸近有意確立が0.057、カイ2乗値は3.635であり関連がやや認められるが、その他の相談形態については満足度との関連は認められなかった。

(4) 室員の現場経験と支援の関係について

室員は、原則、福祉現場での経験や各実習に関連する専門資格を有する。現場経験が支援に役立っているかについての質問では、室員が現場経験を有することを知っていた学生が55人(57.3%)しかおらず、4割を超える学生が室員の現場経験について知らなかった。

しかしながら、現場経験が支援に役立ったかについては、「そう思う」「まあそう思う」「やや思わない」「まったく思わない」の4評定としたところ「そう思う」が53人(55.8%)、「まあそう思う」が25人(26.3%)で、合計で78人(82.1%)が役立ったと回答した。また、現場経験の提供は、「もっと提供してほしい」が45人(47.4%)、「どちらともいえない」が27人(28.4%)、「今のままでよい」が23人(24.2%)であった。

役立った理由についての記述回答では、「経験に基

づいた具体的なアドバイスが役立った」「経験しているからこそ自分の悩みにも共感してもらえた」「説得力がある」「指導が的確」「現実味ある」「イメージがつかみやすい」「不安な気持ちを理解してもらえる」「実習先のことに詳しい」などがあげられていた。理論的な助言よりむしろ学生の疑問や不安を支える形でのアドバイスが学生に有益だったことが示されており、学生はコルトハーヘン (2010:129) のいう「受容」「共感」「誠実さ」「具体性」の4要素を感じていたといえる。

3. 実習希望調査や実習オリエンテーションについて

実習先を決める希望調査の仕方や実習関連オリエンテーションの資料内容・時期については、「現状通りで良い」「変えてほしいところがある」の2択で尋ねたところ、「現状で良い」との回答が希望調査では88人(95.7%)、実習オリエンテーションでは91人(98.9%)で概ね現状通りで問題はないことが分かった。ただ、変更点に関しての記述回答では、複数の編入生から実習先の選択や履修の時期、実習の順序について配慮してほしいとの要望があった。

4. 実習や資格に対する学生の意識や考え方

(1) 学生が思う良い実習の要因について

学生が思う良い実習を行うために重要な要因について過去2回のアンケートを踏まえて選択肢11項目を設定し、「かなり重要である」「まあ重要である」「ど

ちらともいえない」「あまり重要でない」「全く重要でない」の5段階評価とした。結果の単純集計が表8と図1である。「実習先の指導体制が良いこと」「実習プログラムが充実していること」「自分自身の学習意欲が旺盛なこと」を重要視する割合が高かった。

また、良い実習を行うために重要な要因に関する11の評価項目について因子分析による評価項目の妥当性及び因子の内的整合性を確認した。因子分析では、主因子法・プロマックス回転を行った。回転後のパターン行列は表9のとおりで3つの因子に振り分けられた。評価項目の選択にあたっては因子負荷量の0.4以下の項目は除外した。よって、「実習先へ通動しやすいこと」は除外した。また、信頼性分析についてCronbachの α 係数は0.79、0.76、0.75で内的整合性は保たれていたと考えられる。

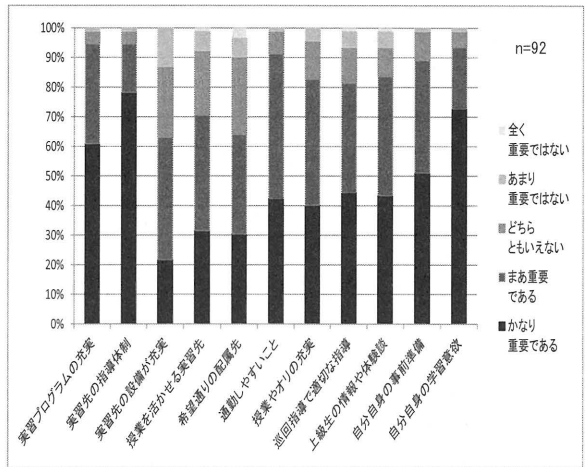


表8 学生が思う良い実習の要因

区分	人 (%)					計
	かなり重要である	まあ重要である	どちらともいえない	あまり重要ではない	全く重要ではない	
実習先プログラムが充実している	56(60.9)	31(33.7)	4(4.3)	1(1.1)	0	92(100)
実習先の指導体制が良いこと	72(78.3)	15(16.3)	4(4.3)	1(1.1)	0	92(100)
実習先の設備が充実している	20(21.7)	38(41.3)	22(23.9)	12(13.0)	0	92(100)
授業の知識を活かせる実習先	29(31.5)	36(39.1)	20(21.7)	6(6.5)	1(1.1)	92(100)
希望通りの配属実習先であること	28(30.4)	31(33.7)	24(26.1)	6(6.5)	3(3.3)	92(100)
実習先へ通動しやすいこと	39(42.4)	45(48.9)	7(7.6)	1(1.1)	0	92(100)
授業やオリが充実している	37(40.2)	39(42.4)	12(13.0)	4(4.3)	0	92(100)
巡回指導で適切な指導を受ける	41(44.6)	34(37.0)	11(12.0)	5(5.4)	1(1.1)	92(100)
上級生の情報や体験談を聞く	40(43.5)	37(40.2)	9(9.8)	5(5.4)	1(1.1)	92(100)
自分自身の事前準備が万全	47(51.1)	35(38.0)	9(9.8)	1(1.1)	0	92(100)
自分自身の学習意欲が旺盛	67(72.8)	19(20.7)	5(5.4)	1(1.1)	0	92(100)

図1 学生が思う良い実習の要因

表9 良い実習の要因に関する評価項目

(主因子法・プロマックス回転)

因子	項目	因子1	因子2	因子3
ニーズ応答的な学習環境	実習先の配属が希望通りであること	0.763	-0.340	0.216
	授業での知識を活かせる実習先であること	0.720	0.216	-0.220
	実習先の設備が充実していること	0.613	-0.011	0.128
	授業やオリエンテーションが充実していること	0.612	0.295	-0.112
	巡回指導で適切な指導を受けることができること	0.457	0.244	0.053
自律的な関与	実習先へ通動しやすいこと	0.335	0.057	0.118
	自分自身の事前準備が万全であること	0.036	0.821	-0.044
	自分自身の学習意欲が旺盛であること	-0.091	0.753	0.334
専門性の高い実習フィールド	事前に上級生等から実習先情報や体験談を聞けること	0.184	0.447	0.056
	実習先のプログラムが充実していること	0.180	-0.022	0.782
	実習先の指導体制が良いこと	-0.093	0.298	0.631
回転後の不可量平方和		3.057	2.827	2.353
因子寄与率		36.272	10.794	6.267
累積寄与率		36.272	47.066	53.333
α 信頼係数		0.790	0.760	0.750

第1因子は除外された項目を除くと5項目で、「実習先の配属が希望通りであること」「授業の知識を活かせる実習先であること」「実習先の設備が充実していること」「授業やオリエンテーションが充実していること」「巡回指導で適切な指導を受けることができること」であり、各項目の特徴から「ニーズ応答的な学習環境」と命名した。第2因子は3項目で「自分自身の事前準備が万全であること」「自分自身の学習意欲が旺盛であること」「事前に上級生等から実習先情報や体験談を聞けること」であり、「自律的な関与」と命名した。第3因子は2項目で「実習先のプログラムが充実していること」「実習先の指導体制がよいこと」であり、「専門性の高い実習フィールド」と命名した。

また、第2因子である「自立的な関与」と第3因子である「専門性の高いフィールド」は相関係数が0.425で相関関係がみられ、学生の自立的な学習への意欲喚起に対する実習調整の重要性が確認できた。

(2) 資格の取得予定と取得理由について

資格の取得予定について尋ねたところ「ある」が83人(90.2%)「ない」が2人(9.8%)だった。

「ある」と回答した学生の取得理由について10項目の選択肢から3つを選んでもらったところ、図2の結果であった。2005年度に実施した同じ質問項目の結果と比較すると就職に有利という回答が2倍以上になっており、将来役に立つからという項目も増えていた。就職状況の厳しさが反映されていることも考えられるが、今回の調査結果だけでは判断できない。

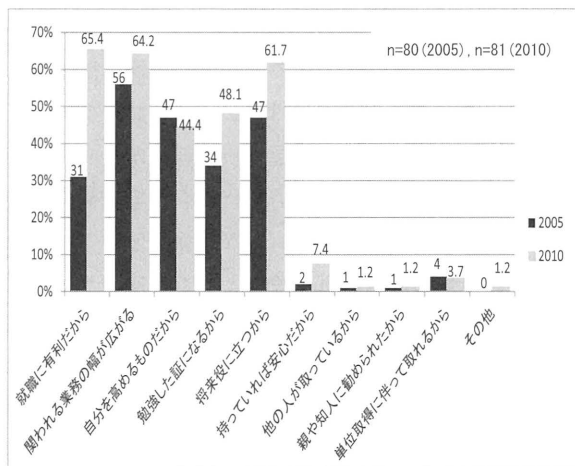


図2 資格取得の理由 (2005年度, 2010年度)

(3) 取得予定の資格と就職に対する希望について

本学で取得できる資格の取得予定(表10)ごとに就職希望の3項目「この資格が必ず必要とされる仕事を希望している」「この資格は必ずしも必要とされていないが持っていた方が良いと思われる仕事を希望している」「この資格とは関係のない仕事を希望している」を選んで回答してもらった。

表10 取得予定の資格

資格	人数	人数
社会福祉士	76	10
介護福祉士	13	2
保育士	14	6
精神保健福祉士	24	
幼稚園教諭		10
高等学校教諭(福祉)(公民)		2
認定心理士		6

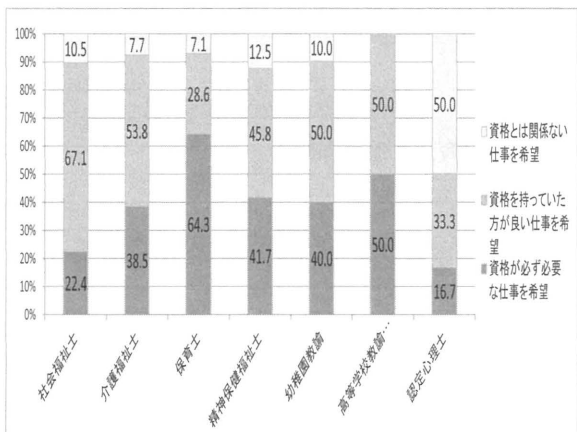


図3 取得予定資格と就職希望の関連

図3の取得予定資格と就職希望の関連をみると、資格が必ず必要な仕事を希望しているのは保育士希望者が顕著であった。一方どちらかと言えば持っていた方が良い仕事の希望は社会福祉士が多かった。Javascriptを利用した有意差検定では、資格を必ず必要とする仕事を希望する割合は、必要有意水準5%では社会福祉士と保育士のみ有意差があり、他の資格は有意差が見られなかった。必要有意水準10%では社会福祉士と保育士、社会福祉士と精神保健福祉士に有意差が見られた。精神保健福祉士の受験資格取得のための実習は4年次で行うため、より焦点が絞られているのかも知れないがこの調査だけでははっきりしない。本学では2資格までが取得可能であり例外的な3資格取得者を省いて、2資格取得者のクロス集計にカイ2乗検定をかけてみると、社会福祉士と保育士(表11)、保育士と幼稚園教諭(表12)、精神保健福祉士と認定心理士(表13)は5%水準で強い関連性がみら

れた。また、社会福祉士と精神保健福祉士（表14）、社会福祉士と幼稚園教諭（表15）にも関連性がみられた。介護福祉士はいずれの資格とも関連性はみられなかった。

表 11 社会福祉士と保育士

	保育士			保育士以外の資格	合計
	資格が必ず必要な仕事を希望	持っていたほうが良い仕事を希望	資格とは関係のない仕事を希望		
社会福祉士	0	0	0	17	17
資格が必ず必要な仕事を希望	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	100.0%
持っていたほうが良い仕事を希望	5	0	2	44	51
持っていたほうが良い仕事を希望	9.8%	0.0%	3.9%	86.3%	100.0%
資格とは関係のない仕事を希望	2	0	0	6	8
資格とは関係のない仕事を希望	25.0%	0.0%	0.0%	75.0%	100.0%
社会福祉士以外の資格	2	4	0	1	7
社会福祉士以外の資格	28.6%	57.1%	0.0%	14.3%	100.0%
合計	9	4	2	68	83
合計	10.8%	4.8%	2.4%	81.9%	100.0%

カイ2乗検定			
	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearsonのカイ2乗	54.837	9	.000

表 12 保育士と幼稚園教諭

	幼稚園教諭			幼稚園教諭以外の資格	合計
	資格が必ず必要な仕事を希望	持っていたほうが良い仕事を希望	資格とは関係のない仕事を希望		
保育士	4	3	0	2	9
資格が必ず必要な仕事を希望	44.4%	33.3%	0.0%	22.2%	99.9%
持っていたほうが良い仕事を希望	0	2	0	2	4
持っていたほうが良い仕事を希望	0.0%	50.0%	0.0%	50.0%	100.0%
資格とは関係のない仕事を希望	0	1	0	0	1
資格とは関係のない仕事を希望	0.0%	0.0%	100.0%	0.0%	100.0%
保育士以外の資格	0	0	0	69	69
保育士以外の資格	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	100.0%
合計	4	5	1	73	83
合計	4.8%	6.0%	1.2%	88.0%	100.0%

カイ2乗検定			
	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearsonのカイ2乗	150.183	9	.000

表 13 精神保健福祉士と認定心理士

	認定心理士			認定心理士以外の資格	合計
	資格が必ず必要な仕事を希望	持っていたほうが良い仕事を希望	資格とは関係のない仕事を希望		
精神保健福祉士	1	0	1	8	10
資格が必ず必要な仕事を希望	10.0%	0.0%	10.0%	80.0%	100.0%
持っていたほうが良い仕事を希望	0	2	1	8	11
持っていたほうが良い仕事を希望	0.0%	18.2%	9.1%	72.7%	100.0%
資格とは関係のない仕事を希望	0	0	1	2	3
資格とは関係のない仕事を希望	0.0%	0.0%	33.3%	66.7%	100.0%
精神保健福祉士以外の資格	0	0	0	59	59
精神保健福祉士以外の資格	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	100.0%
合計	1	2	3	77	83
合計	1.2%	2.4%	3.6%	92.8%	100.0%

カイ2乗検定			
	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearsonのカイ2乗	33.100	9	.000

表 14 社会福祉士と精神保健福祉士

	精神保健福祉士			精神保健福祉士以外の資格	合計
	資格が必ず必要な仕事を希望	持っていたほうが良い仕事を希望	資格とは関係のない仕事を希望		
社会福祉士	6	2	2	7	17
資格が必ず必要な仕事を希望	35.3%	11.8%	11.8%	41.2%	100.1%
持っていたほうが良い仕事を希望	4	9	2	36	51
持っていたほうが良い仕事を希望	7.8%	17.6%	3.9%	70.6%	99.9%
資格とは関係のない仕事を希望	0	0	0	8	8
資格とは関係のない仕事を希望	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	100.0%
社会福祉士以外の資格	0	0	0	7	7
社会福祉士以外の資格	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	100.0%
合計	10	11	4	58	83
合計	1.2%	2.4%	3.6%	92.8%	100.0%

カイ2乗検定			
	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearsonのカイ2乗	19.405	9	.022

表 15 社会福祉士と幼稚園教諭

	幼稚園教諭			幼稚園教諭以外の資格	合計
	資格が必ず必要な仕事を希望	持っていたほうが良い仕事を希望	資格とは関係のない仕事を希望		
社会福祉士	0	0	0	17	17
資格が必ず必要な仕事を希望	0.0%	0.0%	0.0%	57.1%	57.1%
持っていたほうが良い仕事を希望	3	1	1	46	51
持っていたほうが良い仕事を希望	5.9%	2.0%	2.0%	100.0%	109.9%
資格とは関係のない仕事を希望	0	2	0	6	8
資格とは関係のない仕事を希望	0.0%	25.0%	0.0%	90.2%	115.2%
社会福祉士以外の資格	1	2	0	4	7
社会福祉士以外の資格	14.3%	28.6%	0.0%	57.1%	100.0%
合計	4	5	1	73	83
合計	10.8%	4.8%	2.4%	88.0%	100.0%

カイ2乗検定			
	値	自由度	漸近有意確率 (両側)
Pearsonのカイ2乗	17.583	9	.040

IV 考察

実習支援体制に関する調査結果を見ると、レイアウトや資料などの配備、オリエンテーションなどの実施状況については大きな課題はなかった。ただ、開発室の全体的な雰囲気に入りにくさを感じている学生もあり、入りやすい環境設定とともに、来室頻度の低い学生に対しての丁寧な対応を意識的に行う必要がある。

学生への相談支援については、学生の満足度は高く良好に行われているが、学科によって相談件数に大きな開きがあった。また、室員の現場経験が役立っているとの結果であったが、一方で室員の現場経験や相談支援機能など学生にとって有用な情報が伝わっていないため、全体的な雰囲気の改善とともに室のリソースを分かりやすく提示していくことが必要である。相談支援に際しては安易に経験則の支援や助言にならないように留意し、担当教員や実習指導者と連携することも肝要である。

学生の実習や資格と就職に関する意識調査では、良い実習を行うために重要なことについての因子分析から3因子「ニーズ応答的な学習環境」「自発的な関与」

「専門性の高い実習フィールド」が抽出された。

有意義な実習にはそれら3要因への支援だけでなく、要因が複合的に関連していることを視野にいれて、教員、実習指導者と協働で支援体制を構築していくことも重要である。

また、資格ごとに就職への意識は異なるが、学生が就職につなげて資格取得を考える傾向が強くなっており、具体的な就職先を意識して2資格を関連させている傾向も明らかになったことから、初回の実習オリエンテーションの段階から、就職へのビジョンを持てるような情報提供やアドバイスをしていくことも有効だ

と思われる。

今回の調査結果は、2010年夏に実施した他大学の
実習支援部署に対して行った実習コーディネーション
機能に関する調査結果と合わせて改めて考察を行いた
い。

引用文献

- F. コルトハーヘン編著 2010 武田信子監訳 教師教育学-理論と実践をつなぐリアリスティック・アプローチ 学文社

